

東大阪市埋蔵文化財包藏地調査概要30

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要

—昭和63年度—

1989.3

東大阪市教育委員会

は　し　が　き

東大阪市は、西を大都市大阪と接し、東で奈良県と境界を接しています。このため衛星都市としての性格をもちつつ、大阪と奈良を結ぶ交通の要所として重要な位置を占めています。

近年、新しい交通網の整備が進み、再開発の機運が高まりつつあります。この結果、文化財や伝統・風習が急速に失なわれようとしています。とりわけ、埋蔵文化財の調査件数は年々増加の一途をたどっています。

東大阪市教育委員会では、急増する開発に対して毎年国庫及び府費の補助を受けた「埋蔵文化財緊急発掘調査事業」を実施しております。本年度は、植附遺跡第4次調査と夫婦塚古墳の調査を実施いたしました。植附遺跡は、近鉄東大阪線の開通とともに調査が急増している遺跡であり、今回の調査でも古墳時代の柱穴を検出しました。夫婦塚古墳の調査では、須恵器・土師器など多くの副葬品を検出し、石敷が良好に残された石室の調査をおこなうことが出来ました。本年度の調査で得た多くの成果が、今後広く活用されることを願います。

最後に調査の実施にあたって、多大なご協力をいただいた土地所有者に心よりお礼申しあげます。

平成元年3月

東大阪市教育委員会
教育長 木寺 宏

例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が昭和63年度に国庫ならびに府費の補助を受け、発掘調査を実施した植附遺跡第4次調査及び夫婦塚古墳発掘調査報告書である。
2. 各々の遺跡の現場調査期間は、次のとおりである。

植附遺跡第4次調査	昭和63年5月24日～6月8日
夫婦塚古墳発掘調査	昭和64年1月6日～平成元年3月16日
3. 調査関係者及び調査担当者

社会教育部参事	寺澤 勝
文化財課主幹	河本 正（昭和63年8月より）
文化財課主査	原田 修・富山三郎（昭和63年8月まで）
文化財課主任	成尾セツ子
文化財課主任	下村晴文（植附遺跡第4次調査担当）
同課	勝田邦夫
同課	才原金弘（夫婦塚古墳調査担当）
4. 本文の執筆は、各々の調査担当者がおこなった。
5. 現場調査の実施にあたっては、出口精一氏、安原治氏のご協力をいただき、明記してお礼申しあげます。

目 次

植附遺跡第4次調査

I. 遺跡の位置と周辺の環境.....	1
II. 調査に至る経過.....	2
III. 調査の概要.....	3
1. 番序.....	3
2. 遺構.....	4
3. 出土遺物.....	4
IV. まとめ.....	5

夫婦塚古墳調査

I. 調査に至る経過.....	6
II. 位置と環境.....	7
III. 調査の概要.....	9
1. 墳丘.....	9
2. 西側石室.....	10
3. 東側石室.....	13
4. 出土遺物.....	19
IV. まとめ.....	32

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺図	1
第2図 調査地位置図	2
第3図 遺構配置図	3
第4図 トレンチ西壁断面図	4
第5図 出土遺物実測図	5
第6図 調査地位置図	6
第7図 遺跡周辺図	8
第8図 墳丘実測図	9
第9図 人骨実測図	10
第10図 西側石室実測図	11・12
第11図 西側石室床面遺物出土位置図	13
第12図 東側石室床面遺物出土状況実測図	14
第13図 東側石室実測図	15・16
第14図 東側石室床面遺物出土状況実測図	17
第15図 東側石室床面遺物出土位置図	18
第16図 西側石室出土土器実測図	19
第17図 西側石室出土土器実測図	19
第18図 西側石室出土鉄製品実測図	20
第19図 西側石室出土装身具実測図	21
第20図 東側石室出土土器実測図	22
第21図 東側石室出土土器実測図	23
第22図 東側石室出土土器実測図	24
第23図 東側石室出土土器実測図	25
第24図 東側石室出土土器実測図	26
第25図 東側石室出土鉄製品実測図	27
第26図 東側石室出土鉄製品実測図	28
第27図 東側石室出土装身具実測図	29

図版目次

- 図版1 植附遺跡遺構 1. 調査前の状況
2. 調査風景
- 図版2 植附遺跡遺構 1. 石組水路断面検出状況
2. 遺構完掘状況
- 図版3 植附遺跡遺構 1. 遺構完掘状況（東）
2. 遺構完掘状況（西）
- 図版4 夫婦塚古墳航空写真
- 図版5 夫婦塚古墳遺構 1. 古墳全景（南より）昭和47年撮影
2. 古墳全景（南西より）
- 図版6 夫婦塚古墳遺構 1. 西側石室入口
2. 床面検出状況（西側石室）
- 図版7 夫婦塚古墳遺構 1. 石室全景（西側石室）
2. 玄室全景（西側石室）
- 図版8 夫婦塚古墳遺構 1. 棺台1検出状況（西側石室）
2. 棺台3検出状況（西側石室）
- 図版9 夫婦塚古墳遺構 1. 棺台2検出状況（西側石室）
2. 人骨検出状況（西側石室）
- 図版10 夫婦塚古墳遺構 1. 東側石室入口
2. 床面検出状況（東側石室）
- 図版11 夫婦塚古墳遺構 1. 床面検出状況（東側石室）
2. 奥壁（東側石室）
- 図版12 夫婦塚古墳遺構 1. 片袖部壁（東側石室）
2. 片袖部遺物出土状況（東側石室）
- 図版13 夫婦塚古墳遺構 1. 奥壁部遺物出土状況（東側石室）
2. 奥壁部遺物出土状況（東側石室）

- 図版14 夫婦塚古墳遺物 須恵器、土師器、瓦器、装身具(西侧石室出土)
- 図版15 夫婦塚古墳遺物 鉄製品(西侧石室出土)
- 図版16 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版17 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版18 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版19 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版20 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版21 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版22 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版23 夫婦塚古墳遺物 須恵器、土師器(東側石室出土)
- 図版24 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版25 夫婦塚古墳遺物 須恵器(東側石室出土)
- 図版26 夫婦塚古墳遺物 鉄製品(東側石室出土)
- 図版27 夫婦塚古墳遺物 鉄製品(東側石室出土)
- 図版28 夫婦塚古墳遺物 1. 鉄製品(東側石室出土)
2. 装身具(東側石室出土)

表 目 次

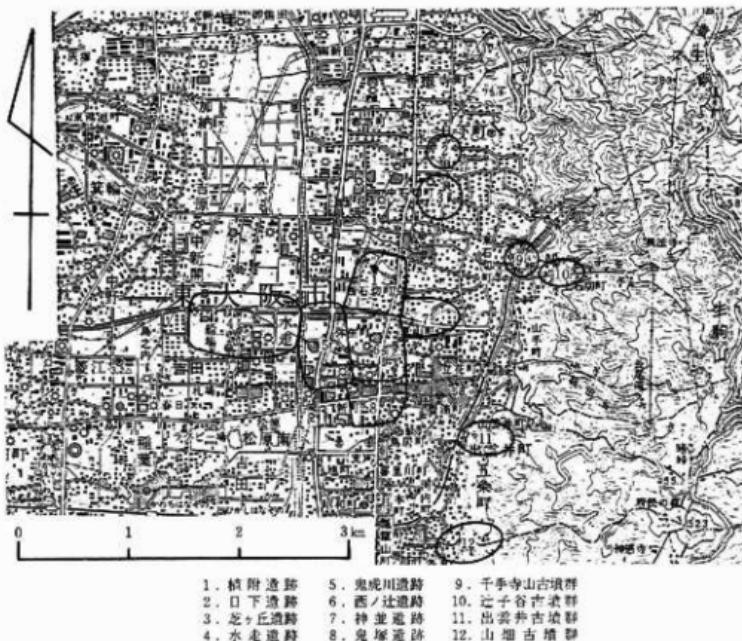
第1表 玉類一覧表 30

植附遺跡第4次調査

I. 遺跡の位置と環境

大阪府と奈良県の境には、標高 642m の生駒山を最高所として南北に生駒山地が連なっている。植附遺跡は、生駒山麓の西麓末端に位置し、前面に河内平野を望む低段丘上に位置している。縄文時代以降古墳時代頃までは、前面の平野は、海水から淡水に変化する違いはあるものの、潟・湖を呈していたと考えられる。したがって、本遺跡の立地は、背後に生駒山麓、前面に湖を望む、好条件をもつてことになる。結果、本遺跡を含めて周辺には縄文時代以来、多くの遺跡が存在することになる。

縄文時代の遺跡として、神並遺跡・鬼塚遺跡・日下遺跡・鬼虎川遺跡があり、縄文時代早期から晩期の土器が確認されている。弥生時代には本遺跡と接するように西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡が確認され、本遺跡を含めた広範囲の集落が考えられている。古墳時代にも神並遺跡・鬼塚遺跡で集落跡が確認されるとともに、塚山古墳や辻子谷・出雲井古墳群が形成されるなど、古代において本遺跡が果した役割の大きさがうかがえる。



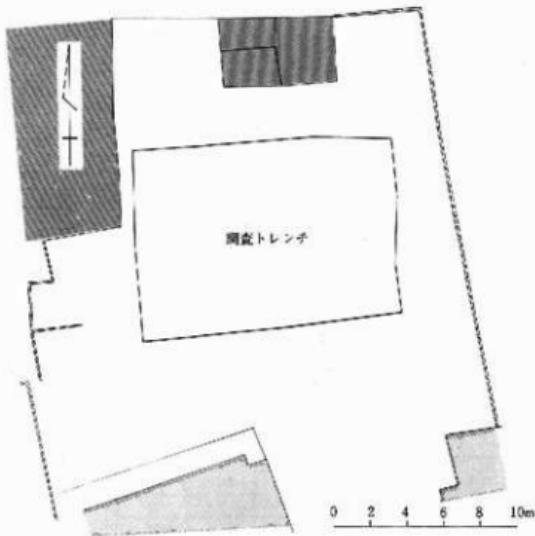
第1図 遺跡位置図

Ⅱ. 調査に至る経過

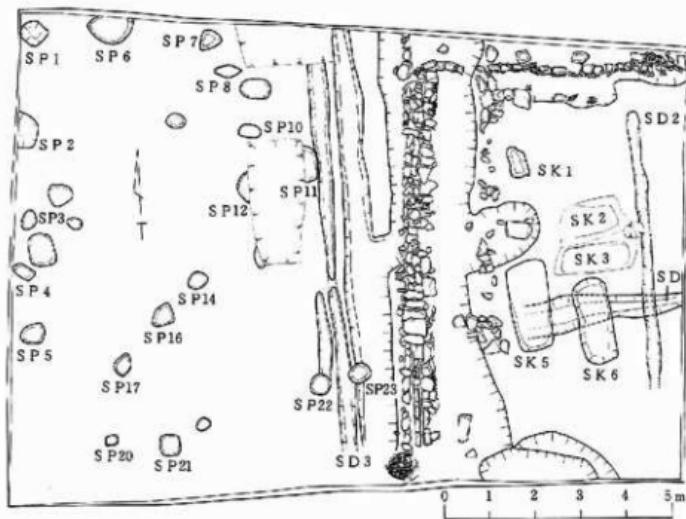
植附遺跡は、東大阪市西石切町1丁目～3丁目に所在する弥生時代～古墳時代、平安時代～室町時代まで続く複合遺跡である。本遺跡は、昭和37年に土器が発見され、小規模な発掘調査の結果、弥生時代の遺跡と周知されるようになった。しかしながら、最近まで本格的な発掘調査はおこなわれておらず、遺跡の性格・規模など不明な点が多い遺跡であった。特に南側に続く西ノ辻遺跡とは、境界も明確でなく、むしろ同一の範囲内で把るべきであるという考え方^(注1)もあった。近年開発に伴う発掘調査が数多く実施され、その結果遺跡の性格も徐々に明らかになってきた。特に、隣接する西ノ辻遺跡との境界には縄文時代晩期に遡る自然の谷（河川）^(注2)が検出されており、本遺跡との境界を画するものとして注目されている。

さて、本遺跡ではこれまで3次の発掘調査が実施されている。1次調査は、昭和61年11月～12月に実施され、鎌倉時代の井戸・土塙・柱穴のほか2基の土塙墓を検出した。また弥生時代中期の土器棺1基も検出している。2次調査は、昭和62年2月～3月に実施され、鎌倉時代の井戸8基・土塙13基、弥生時代の土塙1基を検出した。3次調査は、昭和63年2月～3月に実施され、古墳時代中期の造り付けカマドの痕跡がある竪穴式住居1棟・溝・柱穴群、平安時代の柱穴群が検出されている。このようにこれまでの調査結果から、本遺跡では、古墳時代の集落が発見される可能性が高く、近接する塚山古墳との関係も注目されるところであった。

昭和63年2月に出口精一氏より西石切町3丁目32番地の居宅建替に伴う届出があった。本市教育委員会で試掘調査を実施したところ、古墳時代の遺構・遺物を検出した。この結果、本市教育委員会では、出口精一氏と協議をおこない、昭和63年度の国庫補助事業として発掘調査を実施することになった。調査は、昭和63年5月24日より6月29日まで現地調査をおこなった。調査の期間中、土地所有者の出口精一氏には多くのご協力とご援助をいただいた。感謝してお礼申し上げます。



第2図 調査地位図



第3図 遺構配置図

III. 調査の概要

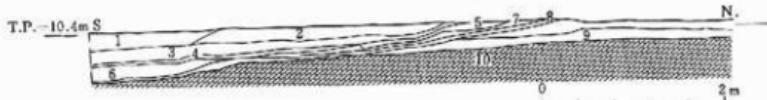
調査地は、江戸時代後期に建築された民家を取り壊した跡地で、礎石や残土が多く残されていたため、まず機械掘削によりこれを取り除いた。その後、人力で掘り下げをおこなった。

1. 層序

調査地の地形は、北に高く、南へ徐々に低くなっている。基本的な層序は以下のとおりである。

- 1層 耕土
- 2層 黄褐色～黒褐色ブロック土混り粘土
- 3層 淡褐色粘土（黄褐色ブロック土混り）
- 4層 黄褐色粘土（整地層）
- 5層 淡褐色土
- 6層 耕土
- 7層 淡褐色土
- 8層 淡褐色土
- 9層 赤褐色粘土～粘土質シルト（古墳時代～鎌倉時代の遺物含む。）
- 10層 黄褐色絆疊～シルト（地山）

調査地の北側では、現地表下約20cmで地山に達し、南では約60cmの深さになる。南側では2



第4図 トレンチ西壁断面図

面の耕土層を検出することから、民家建築前は段々の田圃であったことがわかる。民家建築の際、田園をつぶし、北側の高いところを削り、南側の低いところに盛土をおこなったと思われ、このため、遺構の残りは非常に悪い。

2. 遺構

1) 石組水路

調査地の中央で南北方向にのびる石組の水路を検出した。水路は、幅80cm、深さ約30cmの規模で、中央に丸瓦2枚を合わせて土管として使用している。両側壁には人頭大の自然石を並べ、上部には比較的平坦な石で覆い、さらに小石で隙間を埋め暗渠としている。この石組水路の付近は、以前には蔵が建っており、(大正年間に移動したらしい) 蔵に伴う排水用のものと思われ近世以降につくられたと考えられる。

2) SK1～SK7

近世以降の比較的新しい時期の土塙で、1辺1m、深さ約20cmの規模のものが多く、蔵の移転に伴うものと考えられる。

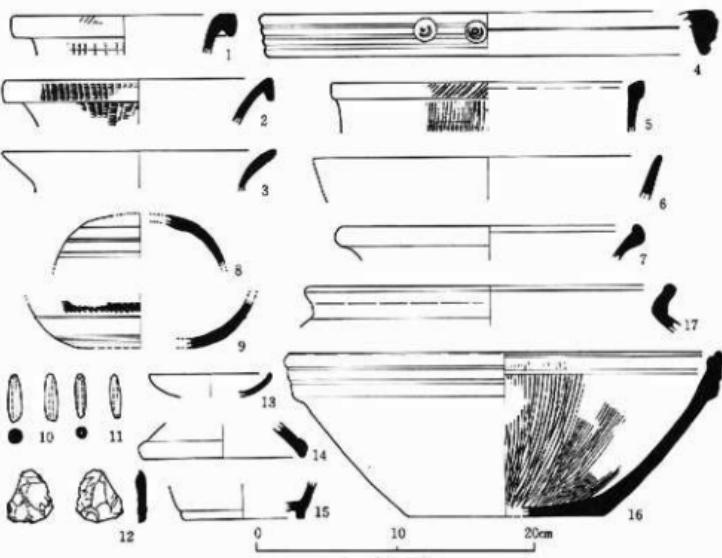
3) ピット群

今回の調査では計23ヶ所のピットを検出した。大半のピットは、近世以降につくられたものであるが、中でもS P 1・3・6・10・11・12・17のピットは、出土遺物から古墳時代に遡る可能性が考えられる。これらのピットは、径20～30cm、深さ20cmの小規模なもので性格などはわからなかった。

3. 出土遺物

今回の調査出土した遺物には、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器碗、陶磁器類などの他、土鍬、石器など多種類のものがあるが、量はコンテナ箱1杯分程度であり多くない。

中でも主体となる土器は、須恵器・土師器である。(8)(9)の杯類は、6世紀前半の時期が与えられる。今回の調査では、遺構は検出されなかったものの、13世紀後半の瓦器碗が出土しており今後周辺の調査で遺構が検出される可能性がある。弥生土器は、いずれも細片であり弥生時代中期～後期のものと考えられる。



第5図 出土遺物実測図

IV. まとめ

今回の調査地点は、江戸時代後期の民家建築の際にかなり造成がおこなわれており、また、以後の蔵の移転などによってかなり搅乱をうけていた。この結果、古墳時代の造構としては7ヶ所のピットを検出したにとどまった。当初予想した古墳時代の集落の規模・性格などは、今回の調査結果からはうかがい知れない。また、弥生時代および中世期の遺物も検出されたが、造構は検出できず、今後周辺の結果を待ちたいと思う。

注1) 藤井直正・都出比呂志「原始・古代の枚岡」枚岡市史第1巻

注2) 「東大阪市文化財協会ニュース」Vol.2, NO.4, 1987年

夫婦塚古墳調査

I. 調査に至る経過

夫婦塚古墳は神並古墳群の1基であり、現状では最も西に位置する古墳と考えられる。神並古墳群内では松井塚、弁天塚古墳が発掘調査され、多くの成果が得られている。松井塚古墳は夫婦塚古墳の東約50mに位置し、6世紀後半の古墳であることが確認されている。石室内からは須恵器、直刀、鉄鎌、耳環、管玉などが出土している。また、弁天塚古墳は発掘調査の結果より6世紀中葉に位置づけられている。

今回の調査は夫婦塚古墳の存在する敷地内で住宅建設が計画されたため、古墳の保存と石室の埋葬状況等を確認する目的で緊急に調査を実施した。調査の結果、両石室内の埋葬状況は非常に良く残されていたため、古墳の保存について協議した結果、保存されることになった。現地調査は昭和64年1月6日～平成元年3月16日まで実施した。



第6図 調査位置図

Ⅱ. 位置と環境

夫婦塚古墳は生駒山西麓の尾根筋上に立地する神並古墳群の1基である。現在の行政区分では東大阪市東石切町2丁目に位置する。

夫婦塚古墳の周辺に入々が住み始めるのは旧石器時代からであり、北約200mに正興寺山遺跡が存在する。正興寺山遺跡からはナイフブレードが採集されている。正興寺山遺跡周辺の神並、鬼虎川、千手寺山、草香山、芝坊主山遺跡などからも旧石器が発見されている。

縄文時代になると西300mの位置に神並遺跡が出現する。神並遺跡からは押型文土器と共に土偶、有舌尖頭器、石鐵などが出土している。炉跡と考えられる遺構も検出されており、早期の集落を形成していたと考えられる。後期から晩期になると遺跡の数も増加し、日下、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などがある。これらは扇状地上に立地し、西に河内湾が広がっていた。日下遺跡は府下でも数少ない貝塚として著名な遺跡であり、近年、環状列墓や竪穴住居も検出されている。

弥生時代になると扇状地上や扇状地から平野部へ移行する地点にも遺跡が出現する。西ノ辻、鬼虎川、植附遺跡などがある。当時期は前時代の河内湾が潟・湖へと移行した頃である。当時の人々は河内平野で稲作を開始し、農耕集落を形成していた。鬼虎川遺跡では水田跡と考えられる杭列、杭群が検出されている。また、集落跡としての建物跡、井戸、柱穴、土塙や墓も検出されている。扇状地から平野部へ移行する地点に立地する鬼虎川遺跡が前期～中期の大集落を形成していたと同様に、西約6kmに位置する瓜生堂遺跡でも同じ状況が確認されている。瓜生堂遺跡は弥生時代の代表的な墓の1つである方形周溝墓が盛土をもつことが確認され、全国的に著名となった遺跡である。弥生時代の遺跡は平野部にも出現するのが大きな特色である。

古墳時代になると前代と同様の地点に数多くの遺跡が確認されている。平野部では西岩田、意岐部、山賀、瓜生堂、若江、西岩田遺跡などがあり、また、扇状地上には縄手、鬼塚、西ノ辻、植附遺跡などの集落がある。西ノ辻、植附遺跡などからは竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土塙、ピットなどが検出されている。一方、生駒山西麓の各尾根筋上には数多くの古墳が造営されている。東大阪市域では最も古い古墳は中期のものがあり、塚山古墳、えのき塚古墳などがあげられる。後期になると古墳は急激に増加し、群を形成するようになる。古墳の石室は横穴式石室である。墓尾、辻子谷、みかん山、出雲井、客坊山、山畠、花草山、五里山古墳群などが代表的な群集墳である。これらの古墳群は5～10基の群集から数十基を数えるものがある。

今回、調査した夫婦塚古墳も群集墳の中の1基であり、神並古墳群に属する。神並古墳群は夫婦塚古墳が立地する尾根と弁天塚古墳が立地する尾根から構成されている。神並古墳群の調査は松井塚古墳、弁天塚古墳で実施されている。出土遺物などから6世紀中葉～後半の時期に築造されたと考えられている。



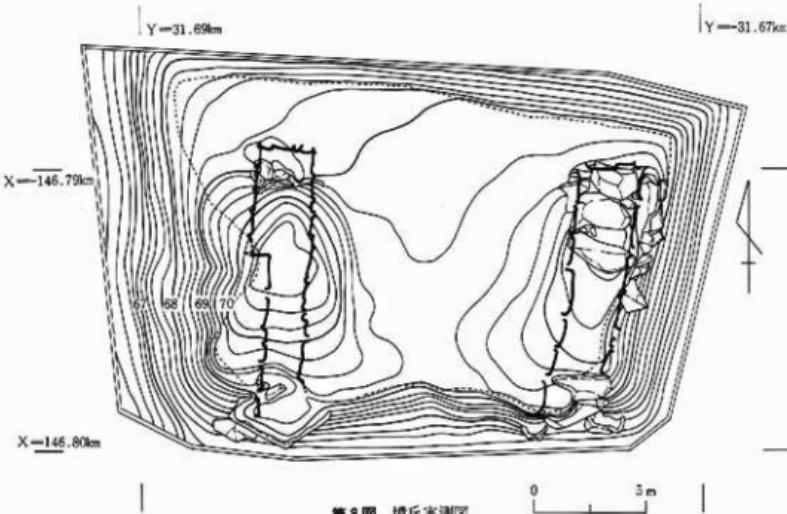
第7図 透跡周辺図

III. 調査の概要

1. 墳丘

墳丘測量は、昭和63年2月に下村晴文氏によって実施されており、その報告については引用文献から再掲載する。

……次に墳丘調査の結果をまとめておきたい。調査前には、墳丘はかなり旧状を保っていると考えたが、測量図のとおり、墳丘裾は後世の削平によって周辺すべてが削りとられていた。かろうじて、西石室の西南コーナー付近に原形を認めることができるが、これだけでは双円墳であると断定はできない。このため、推定復元になるが、測量によって得られた数値を以下に示しておきたい。現状で東西長21.5m（推定で24.5m）、南北長東墳で14.0m（推定16.0m）、西墳13.5m（推定16.0m）、高さ現状で西墳頂4.6m、東墳頂2.6mを測る。東墳頂は盛土は、かなり流出し天井石が露出している。発掘調査の結果を待たねばならないが、ここでは推定で古墳の築造過程を考えておきたい。まず、双円墳と考えた場合、東から西へ派生する小丘陵の突端を地面上で整地をおこなう。西側は、かなり低くなるため、標高69mまで盛土をおこない、平坦にした上で、両石室の墓塚を掘ったと思われる。石室構築後、各々の石室に盛土をおこなうという二段築成で双円墳形をつくり出したものと考えられる。この場合、東石室は西石室よりも大きくなっているため、東墳丘が少し大きい瓢箪形をしていたと思われる。別の視点から推測するならば、近接してつくられた円墳2基がたまたま周辺の開発から取り残されて、双円墳状を呈するようになったとも考えられ、この場合、西墳丘は径12.0m前後、東墳丘は径13.0m前後と推定される。………



第8図 墳丘実測図

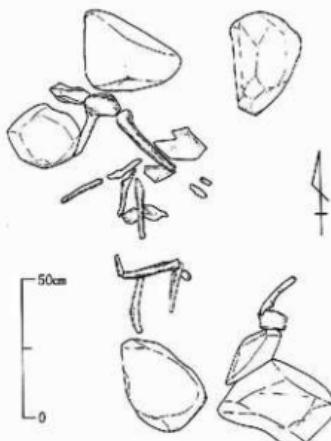
2. 西側石室

1) 石室

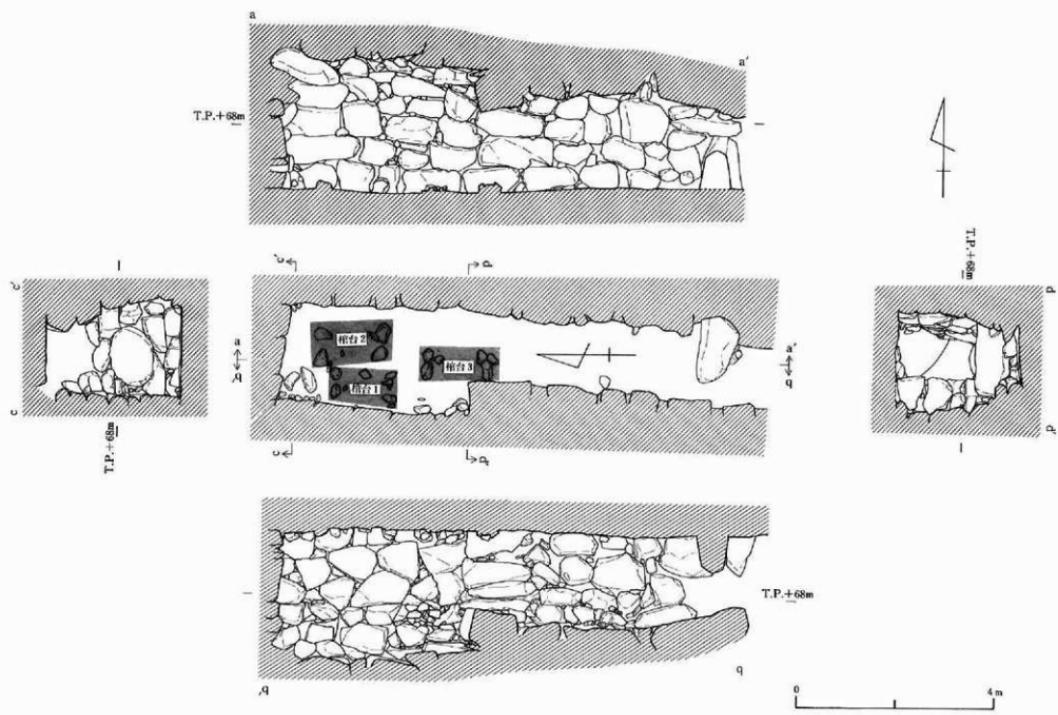
主体部は主軸がN-1°-E方向を向く左片袖式の横穴式石室である。石室の遺存状態はやや悪い。羨門は開口しており、入口の南側壁に使用された石が本来より約90°動かされている。また、羨道部で天井が0.8m×0.3mで開く。奥壁も同様であり、1.3m×1.0mが開き、一部の石は玄室内に落ち込む。石室内は奥壁、羨道部天井、羨門より流入した土砂が堆積する。土砂は奥壁部と羨門部で厚く堆積しており、羨道と玄室の境に向かって薄くなる。堆積土の層厚は奥壁で90cm、羨門部で80cm、羨道と玄室の境で50cmを測る。堆積層は大きく2層に分けられ、上層は近代～中世の遺物を含み、下層は中世～古墳時代の遺物を含む。上層は10cm前後の礫も含む。

石室は全長9.6mを測る。玄室は奥壁幅1.9m、玄門部での幅2.0m、長さ3.9m、最大高2.6m、羨道は幅1.4m、長さ5.7m、最大高1.9mである。奥壁は6段目より上を崩壊するが、さらに2～3段あったと考えられる。石は1辺0.5～0.8mを中心を使用しており、1～2段目が3石を配する。3段目左側で1辺1.2mの比較的大きな石を配し、2石で構築する。左側部分は小石を詰める。上部も3石を基本とする。側壁は玄室で5段、羨道で4段にて構築する。奥壁よりやや大形の石を使用し、1辺0.8～1.2mのものが多い。1段目は奥壁より羨道に向かって構築しており、引き続き2段目、3段目と積み上げている。石は横長に配する。玄室の5段目と羨道の4段目は乱雑に小石を詰める。天井石は奥壁で1石を欠落するが、本来は10石を配する。

床面では敷石と考えられるものは検出できなかったが、玄室で1辺10～15cmの小石が認められた。棺台と考えられる石を3ヶ所で確認した。棺台1は玄室西側に位置し、6個の石より構成されており、北側の隅に2個、南側に3個、東側に1個を配する。石は1辺20～30cmのものを使用し、最大長1.6m、最大幅0.6mを測る。棺台2は棺台1の東に位置する。5個の石より構築されており、北側に2個、南側に3個を配する。石は1辺30～40cmのものを使用し、最大長1.6m、最大幅0.8mを測る。棺台3は棺台1・2の南側に位置し、玄室から羨道の間にある。6個の石より構築されており、北側に3個、南側に3個を配する。石は1辺20～40cmのものを使用し、最大長1.6m、最大幅0.6mを測る。棺台2では人骨を検出したが、保存状態は非常に悪い。頭位は南を向き、仰臥屈肢で埋葬されていた。棺台と考えられる石が3ヶ所で確認されたことから、3回の埋葬がおこなわれている。石棺の出土がなく、鉄釘が多く出土したことから棺は、すべて木棺と考えられる。



第9図 人骨実測図



第10圖 西側石室測圖

2) 西側石室遺物出土状況

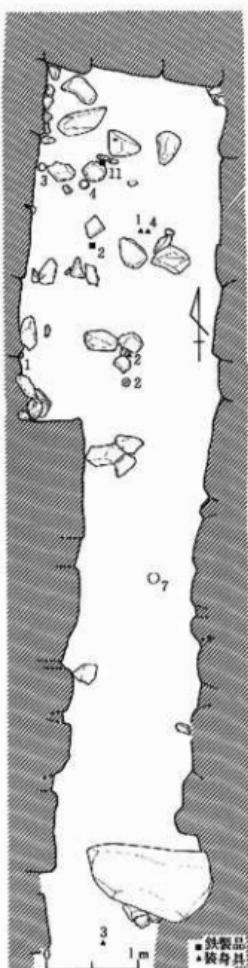
西側石室の上層より中世の遺物が出土した。完形の瓦器、上部器も数点ある。床面では埋葬時の副葬品と考えられる土器などが出でたが量は少ない。須恵器無頬壺、杯、蓋などがある。羨道部中央で蓋(25)を検出した。玄室では無頬壺1、杯3を検出した。無頬壺(1)は片袖部で検出した。棺台1の北西で杯(3)、北東で杯(4)、棺台3の東で杯(5)を検出した。すべて完形品である。棺台2の中央で琥珀製壺玉(3)と銀製耳環(1)が出土した。棺台3の北で耳環(2)が出土した。羨道部入口で琥珀製壺玉(4)が出土した。鉄製品は鉄鏃、釘などがあるが、鉄鏃は玄室で出土した。釘は多量に認められたが、大部分は玄室より出土した。鉄製品は床面で検出したものは少ない。床面出土遺物の詳細な地点については第11図を参照されたい。

3. 東側石室

1) 石室

主体部は主軸がN—A—E方向を向く左片袖式の横穴式石室である。石室の遺存状態は良好である。羨門は開口する。奥壁西の天井部が $1.0m \times 0.7m$ で開く。羨門の天井石は掘削をおこなうと崩壊する危険性があったので東側部分を残した状態で調査した。石室内には奥壁天井部と羨門より土砂が流入する。土砂は西側石室と同様に奥壁と羨門部で厚く堆積しており、羨道と玄室の境に向かって薄くなる。特に羨門部は土砂が多く、天井石の近くまで堆積する。堆積土の層厚は奥壁80cm、羨門部で120cm、羨道と玄室の境で50cmを測る。堆積層は大きく2層に分けられ、上層は近代～古墳時代の遺物を含み、下層は中世～古墳時代の遺物を含む。上層は10～40cmの礫を多量に含む。特に羨門部と奥壁に集中する。

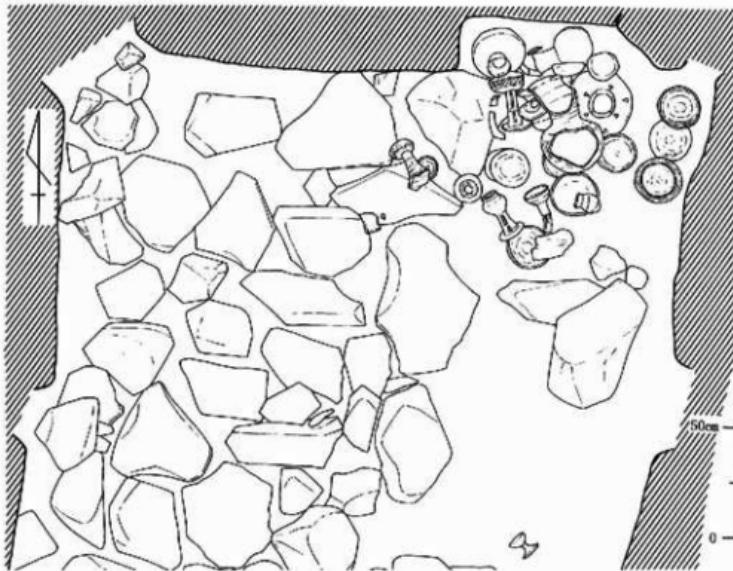
石室は全長9.4mを測る。玄室は奥壁幅2.3m、玄門部での幅2.2m、長さ3.0m、最大高3.2m、羨道は幅1.8m、長さ6.4m、最大高1.9mである。西側石室に比して大形の石を使用する。片袖部の張り出しは少ない。また、石室は西方向に向かってやや弯曲する。奥壁は大形の石を使用して3石で構築す



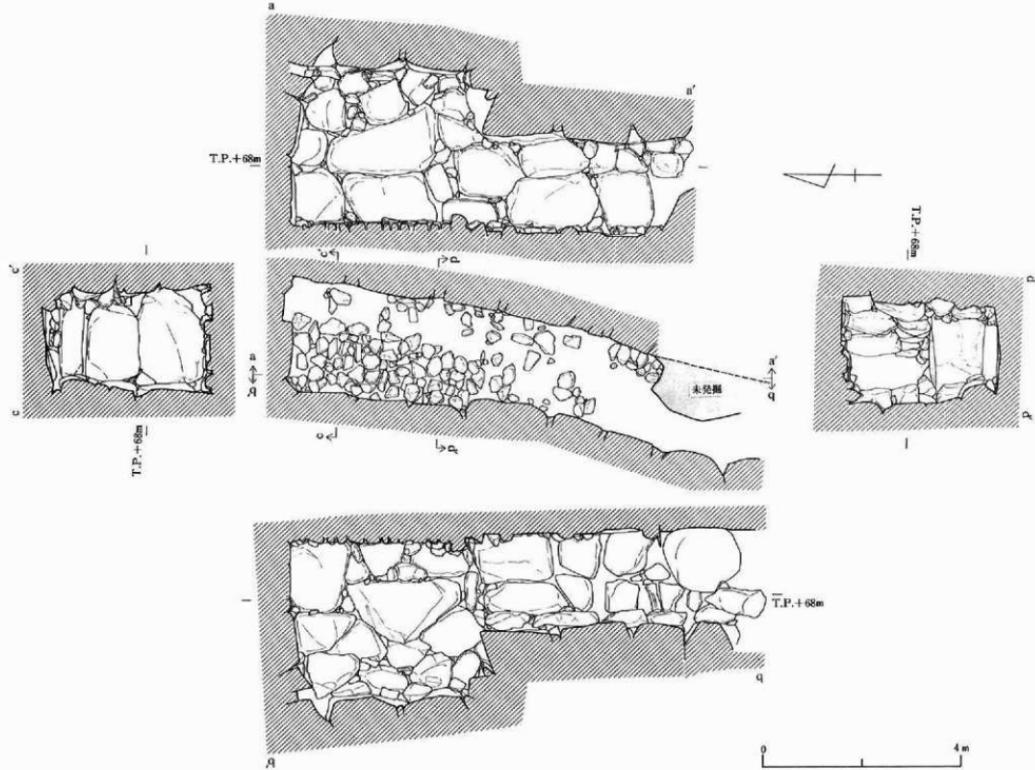
第11図 西側石室床面遺物出土位置図

るが、特に1段目ものは大きい。奥壁の東西は小形の石を詰めて構築する。側壁は玄室で4段、狭道で3段にて構築する。1段目は奥壁より狭道に向かって構築しており、引き続き2段目、3段目と積み上げている。1、2段目は特に大形の石を使用しており、西側石室と同様に横長を利用する。玄室の3、4段目は小形の石をやや乱雑に詰めて構築する。狭道部の西側壁3段目は整然として小形の石を配する。東側壁3段目は小石を詰める程度で終る。天井石は8石を配する。

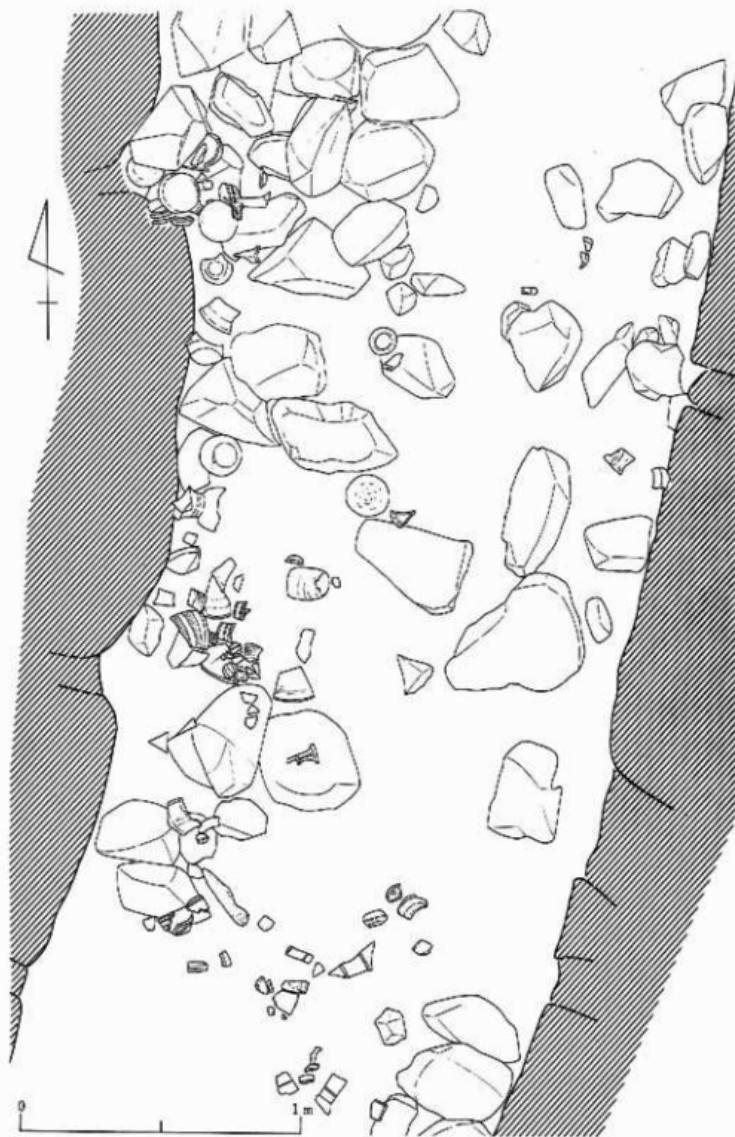
床面では1辺20~60cmの石を使用した敷石を検出した。敷石は玄室の西側半分と狭道の東側部に密集する。玄室東側と狭道の西側部でも同大の石を検出した。狭道部に密集する石から考えて、本来は全域に敷石があったと考えられる。また、検出した遺物が埋葬時の原位置を保っていないことから、追葬時か後世に敷石が抜き取られたと考えられる。東側石室では2回の埋葬が考えられるが、石棺の出土もなく、鉄釘と考えられる明確な資料もない。



第12図 東側石室床面遺物出土状況測定図



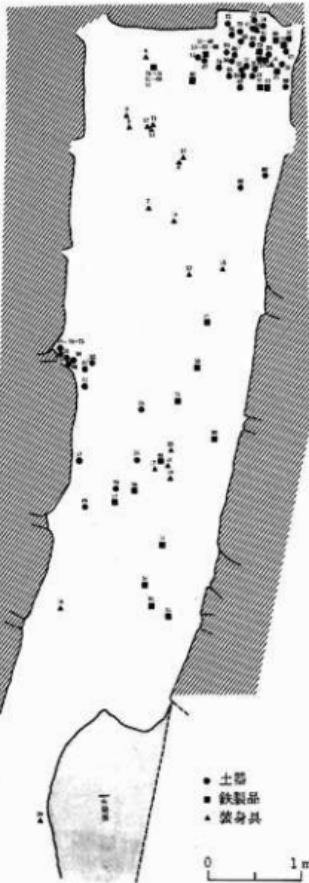
第13圖 東側石面尖測圖



第14図 東側石室床面遺物出土状況実測図

2) 東側石室造物出土状況

東側石室では上層より中世の遺物が出土した。狭道部で多く認められたが、玄室内からも少量出土した。11~12世紀の瓦器碗、土師器小皿・羽釜などがある。今回の報告では掲載していない。床面では埋葬時の副葬品が多く出土したが、原位置を保っていない。追葬時に移動されたものと考えられる。副葬品は須恵器、土師器、鉄製品、装身具などがある。土器は大きく3グループに分けられ、玄室奥壁の東側（Aグループ）、片袖部（Bグループ）、狭道部（Cグループ）に集中していた。Aグループのものは蓋（29・30~32・67・74）、杯（36~38・40・42）、躰（46・47）、高杯（49~51・56・63）、脚付無頸壺（68）、壺（72・83）、脚付長頸壺（75・76）、器台（85）、装飾部品（86~88・90~93）がある。完形品のものが多いが、一部分を欠損するものもある。Bグループのものは蓋（25・26・69）、杯（39）、高杯（48・52・55）、無頸壺（70）、壺（73）、提瓶（80）がある。出土状況はAグループと同様である。蓋69と無頸壺70は蓋を被せた状態で出土した。Cグループは蓋（27・28・33・34・78）、杯（35・41・43）、高杯（53・54・59・58・64）、無頸壺（71）、脚付長頸壺（77・79）、壺（82）、器台（84）がある。Cグループは破損して周辺に散乱したものが多く認められた。B・Cグループの区別は難しい。また、Aグループの器台86は杯部がDグループ中より検出された。土器接合の結果同様のことが他についても認められた。鉄製品は玄室奥壁に集中していたが、他の位置でも認められた。奥壁部では形状の明確なものが多かったが、狭道より玄室中までのものは破損しており、形状の不明確なものが多い。鐵鎌（38~48・50~53）は奥壁部で集中した状態で検出した。馬具も奥壁部で多く認められた。馬具（76~87）は床面の敷石内に落ち込んだ状態で検出した。玉類は石室の全域で検出したが、玄室中央と狭道中央で特に多く認められた。床面出土遺物の詳細な地点は第15図を参照されたい。



第15図 東側石室床面造物出土位置図

4. 出土遺物

西側石室と東側石室の床面で古墳に伴なう遺物が出土した。床面の上層では中世の瓦器、土師器、輸入磁器を検出した。

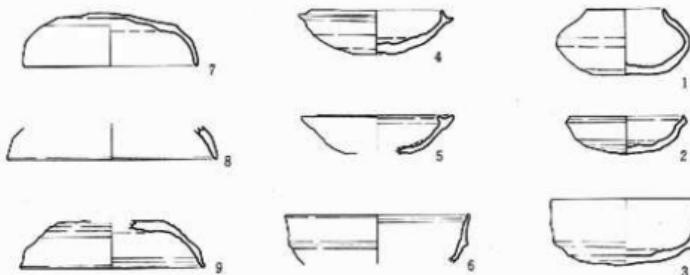
1) 西側石室出土遺物

西側石室床面より須恵器、土師器と鉄製品、装身具を検出した。上層より中世の瓦器、土師器、輸入磁器を検出した。

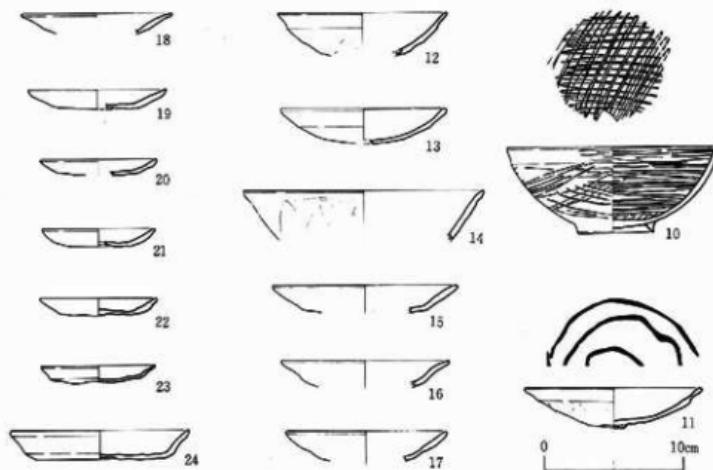
須恵器（第16図1～9）

無頸壺、杯、高杯、蓋の器種がある。

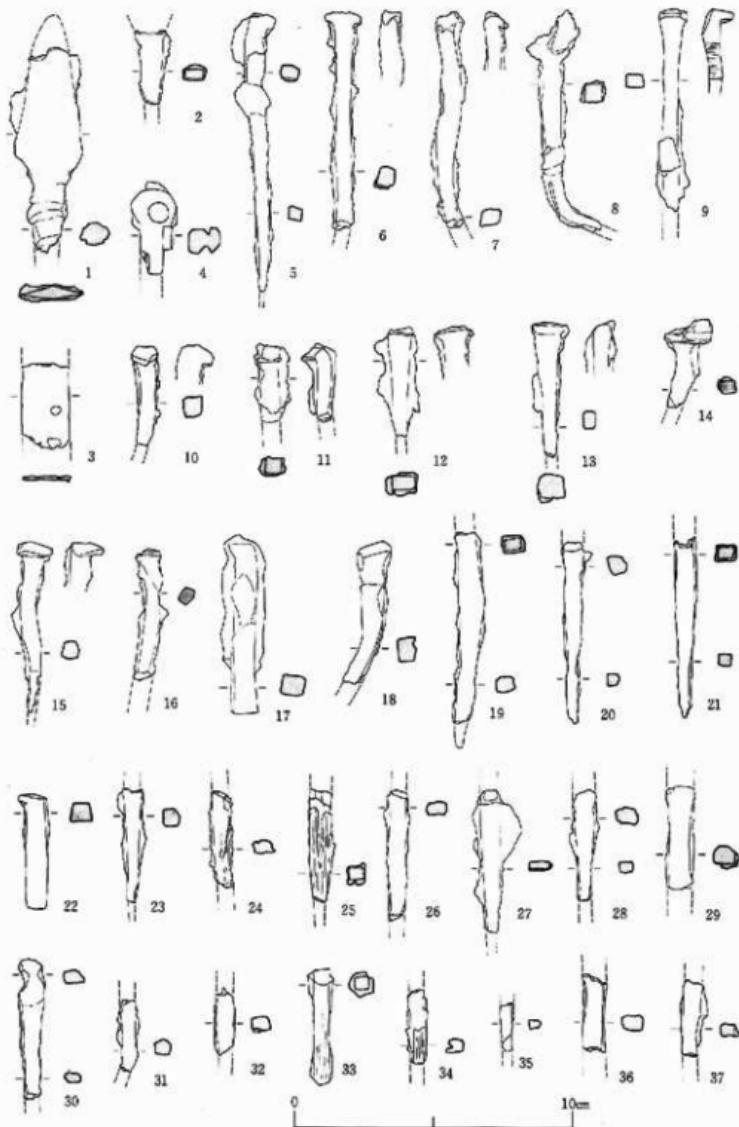
無頸壺（1） 体部が扁球形を呈する無頸壺である。口縁部はゆるく上方へ外反し、口縁端部が尖り気味に終る。底部外面は回転ヘラケズリ調整する。



第16図 西側石室出土土器実測図



第17図 西側石室出土土器実測図



第18圖 西側石室出土鐵製品実測図

杯（2～5） 杯は浅い皿状を呈し、口縁部がゆるく外反するもの（2）、やや深い椀状を呈し、口縁部が上方へ伸びるもの（3）、浅い皿状を呈する体部より受部が水平方向に伸び、口縁部がつまみ上げ気味に立ち上がるものの（4・5）がある。すべて底部外面は回転ヘラケズリ調整する。

高杯（6） 椭状を呈する体部より口縁部がゆるく外反する。体部と口縁部の境に棱がつく。口縁部内面に凹線をめぐらす。

蓋（7～9） 杯とセットになる蓋である。天井部が扁平で、口縁部との境の稜線が不明瞭である。口縁端部は丸く終る。天井部外面は回転ヘラケズリ調整する。

土師器

図化できる土器はなかったが杯と考えられるものがある。

中世の土器（第17図）

瓦器椀（10～13） 深い椀状を呈するもの（10）と浅い皿状を呈するもの（11～13）がある。10は口縁端部内面に沈線をめぐらす。見込み部に斜格子の暗文を施し、体部内外面をヘラミガキ調整する。11は内面に渦巻状の暗文を施す。

青磁椀（14） 逆八字形に開く体部より口縁部が短く外反する。体部外面に連弁文を施す。

土師器皿（15～24） 口縁部が大きく逆八字形に開くもの（15～19）、内弯気味に立ち上がるものの（20・21）、外反するもの（22～24）がある。風化が著しく調整法は不明。

鉄製品（第18図）

鉄製品は鐵鑓（1・2）、馬具（4）、用途不明品（3）、鉄釘（5～37）がある。1・2は短頭鑓である。鑓身が菱形を呈する。4は馬具の一部と考えられるもので円形の穴を有する。3は長方形を呈する用途不明品であり、長辺の一辺がL字形に曲がる。5～37は鉄釘であり、長さが10cm前後である。頭部はL字形であり、横断面が方形か長方形を呈する。

装身具（第19図）

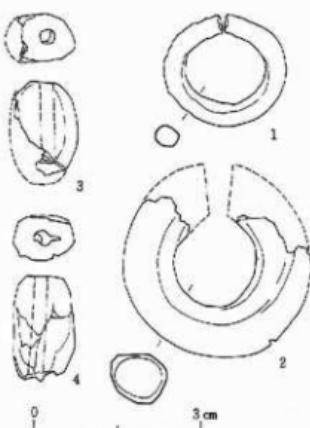
耳環（1・2）と玉（3・4）がある。2は銅に金箔を被せたものである。1は銀製であり2に比して径が小さい。3・4は琥珀製纏玉である。

2) 東側石室出土遺物

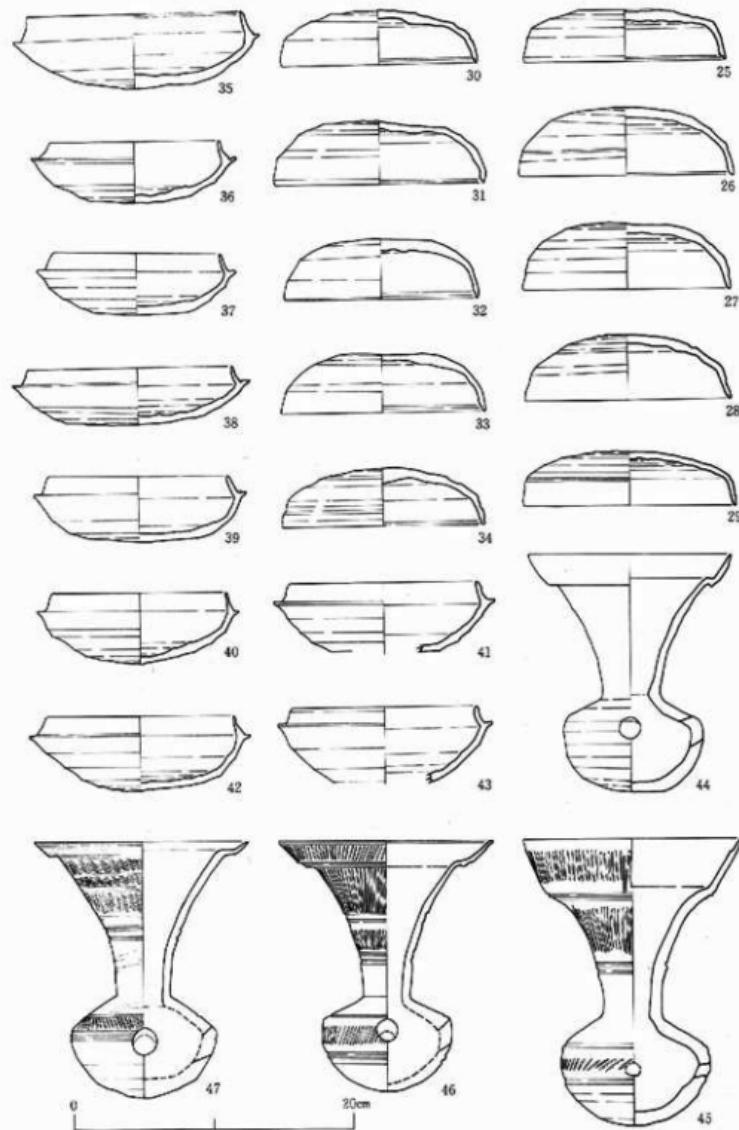
東側石室床面より須恵器、土師器、鉄製品、装身具を検出した。上層より中世の瓦器、土師器などを検出した。

須恵器（第20～24図）

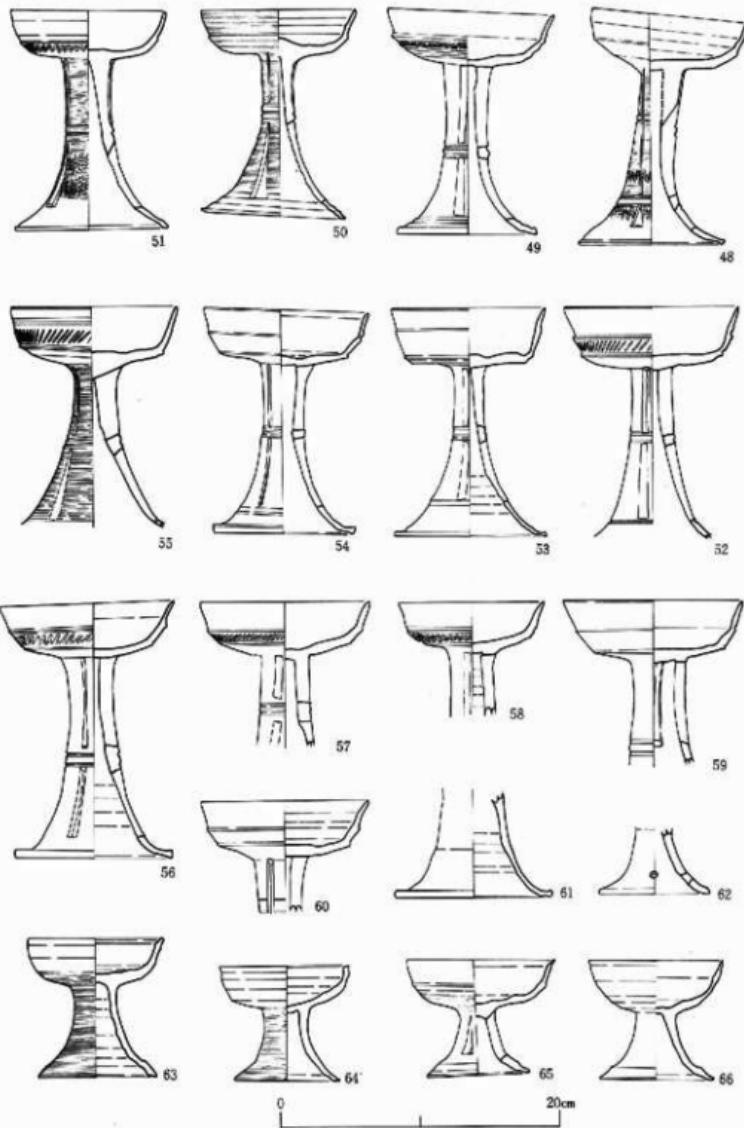
蓋、杯、碗、高杯、脚付無頭壺、無頭壺、脚付長頭壺、広口壺、椀、提瓶、器台、装飾部品



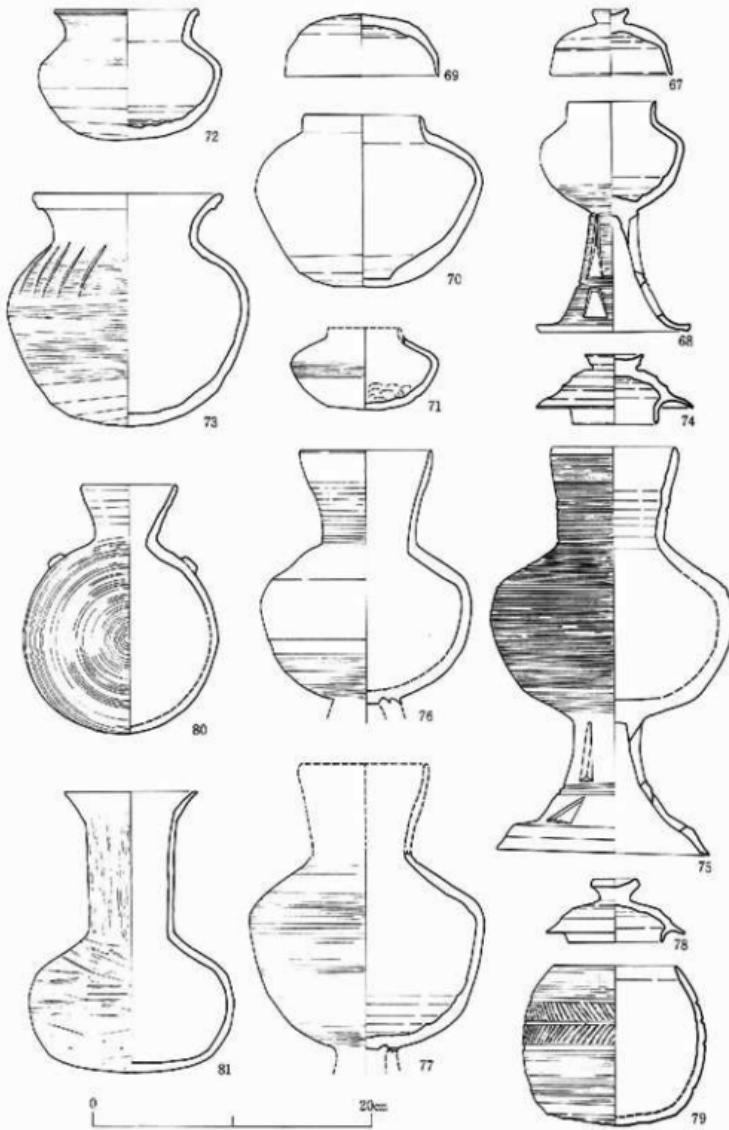
第19図 西側石室出土装身具実測図



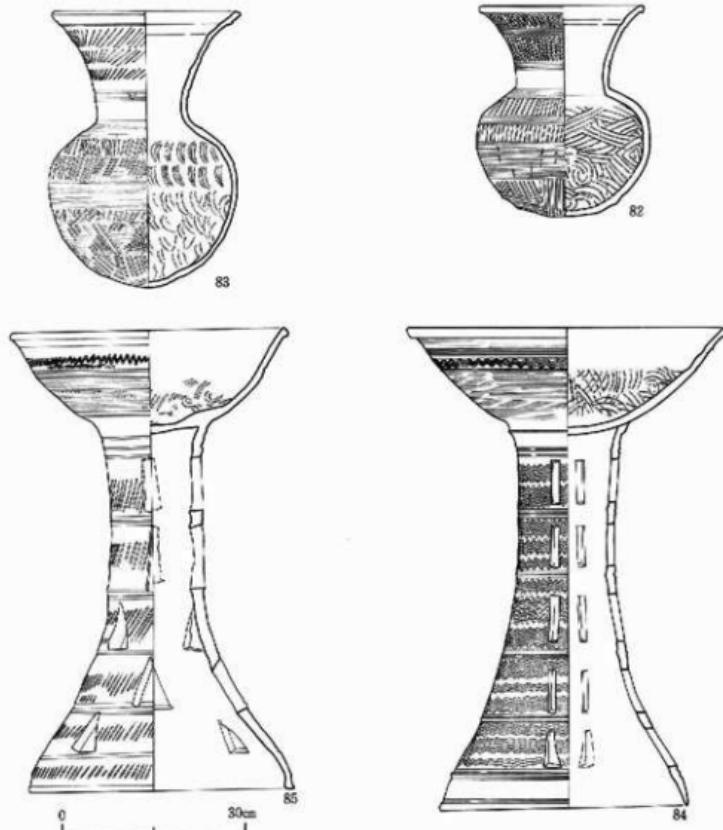
第20圖 東側石室出土土器実測図



第21圖 東側石室出土土器實測圖



第22圖 東側石室出土土器大湊圖

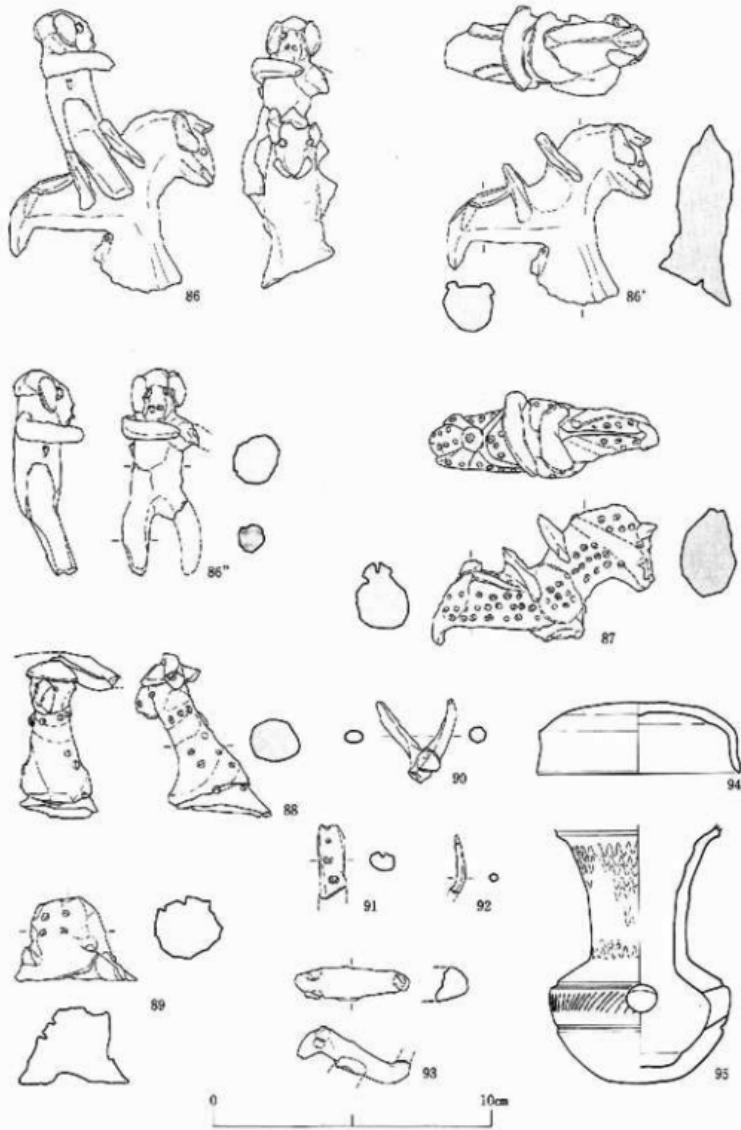


第23図 東側石室出土土器実測図

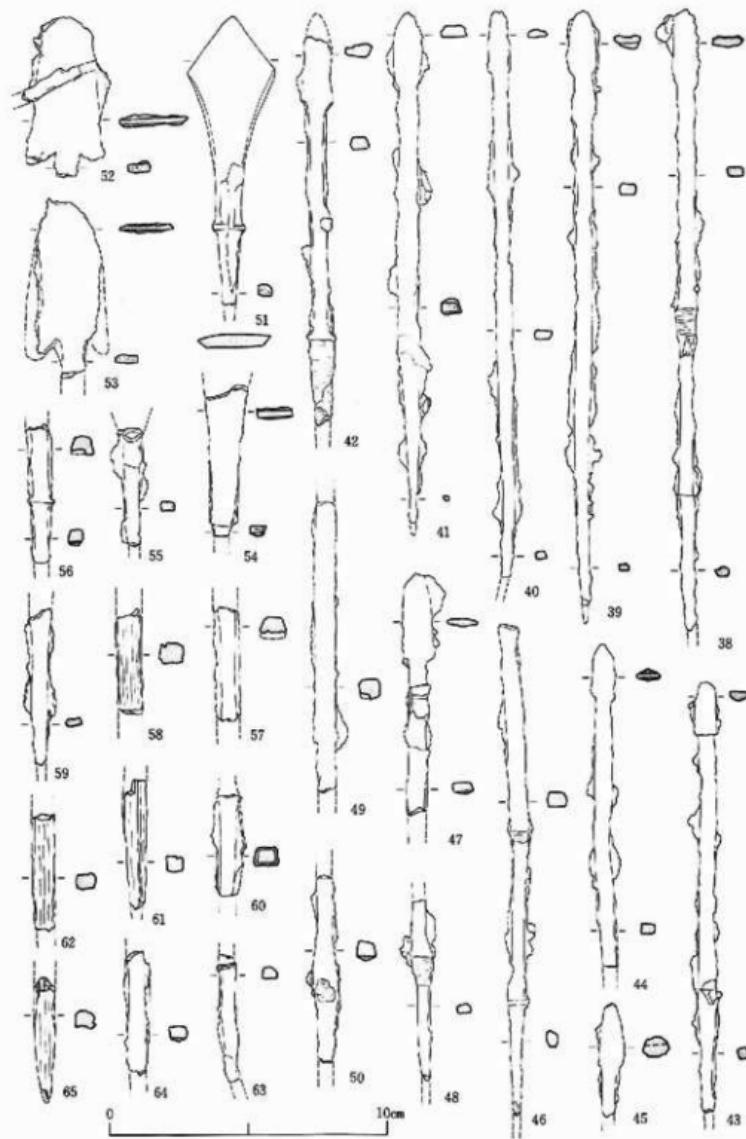
小形蓋、小形壺がある。

蓋 (25~34・67・69・74・78) 25~34は杯とセットになる蓋である。天井部がやや扁平なものと丸味をもつものがある。口縁端部は面をもち、わずかに凹線をめぐらすものと丸く終るものがある。天井部外面は回転ヘラケズリ調整する。天井部内面はナデ調整するものが多い。67は脚付無頸蓋 (68) とセットの蓋である。天井部に円形のつまみが付く。69は無頸蓋 (70) とセットになる蓋であり、蓋に被せた状態で出土した。形態は杯の蓋と類似するが小形である。74は脚付長頸蓋 (75) の蓋である。口縁部がつまみ上げ気味に伸び、天井部につまみが付く。外面は蓋と同様に赤色塗料を施す。78は椀 (79) とセットになる蓋であり、形態は74に類似する。

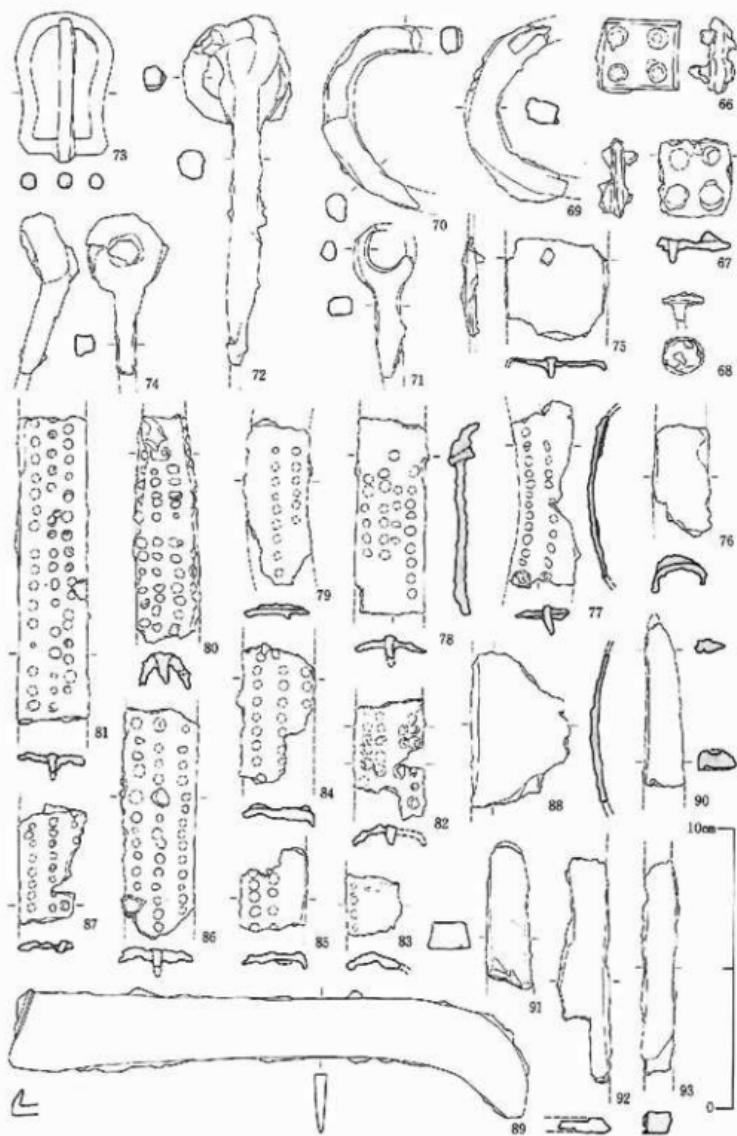
杯 (35~43) 丸底に近い平底の底部より、受部が外上方か水平方向に伸びる。口縁部は内



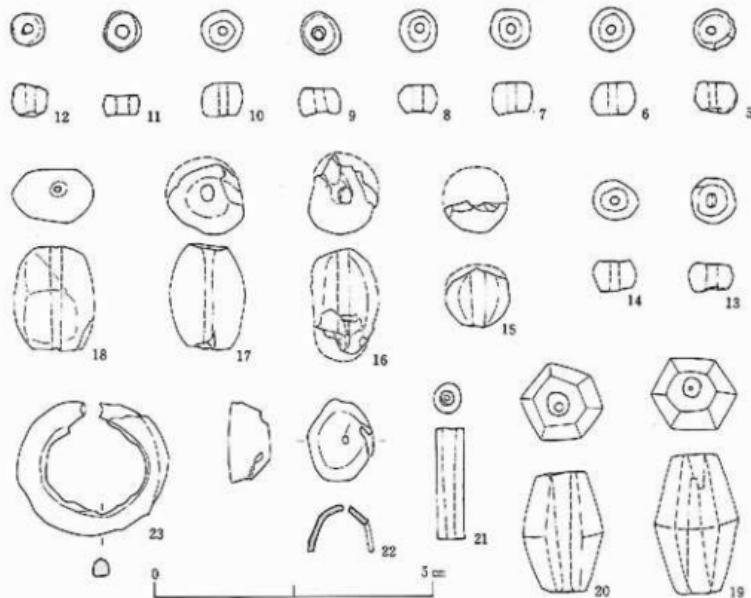
第24圖 東側石室出土土器実測図



第25図 東側石室出土鉄製品実測図



第26圖 東側石室出土鐵製品實測圖



第27図 東側石室出土表身具実測図

傾しながら、わずかに外反する。口縁端部は丸く終るものが多いが、凹線をめぐらすもの(35)もある。底部外面は回転ヘラケズリ調整する。

聰(44~47) 球形の体部より頸部が大きく外上方へ伸びる。頸部と口縁部の境は段がつき、受口状に口縁部が立ち上がる。体部に円形を呈する孔を斜めに穿つ。44は無文、45~47は有文であり、列点文や櫛描波状文などを施す。底部下半の外面は回転ヘラケズリ調整する。47は口縁部から体部上半の外面をカキメ調整する。

高杯(48~66) 脚部の細い無蓋高杯である。脚部は細長いもの(48~61)と短いもの(62~66)がある。48~61は杯部が浅い皿状を呈し、口縁部と体部に1段の稜がつくもの(48~51)と2段の稜がつくもの(52~60)がある。脚部は2段透しで3方向のものが多いが、2方向のもの(54)、4方向のもの(50)もある。また、上段が末貫通のもの(48・51)がある。無文と有文のものがあり、杯部や脚部に櫛描列点文や波状文を施す。48・50・51・55はカキメ調整する。62~66は脚の短い高杯であり、杯部が浅い椀状を呈する。口縁端部は面をもつもの(63・64)と丸く終るもの(65・66)がある。62は小円孔、65は三角形の透しを脚部に穿つ。63~65はカキメ調整を杯部や脚部の一部にする。

脚付無顯壺(68) 球形の体部より口縁部が短く外反する。脚部は細長く八字形に開く。脚部に台形を呈する2段の透しを施す。体部下半の外面は回転ヘラケズリ調整、脚部外面はカキ

表1. 玉類一覧表

No	種類	材質	長(mm)	巾(mm)	孔径(mm)	重量(g)	色	出土位置	備考
5	小玉	ガラス	5.0	7.3	1.6	0.4	あい色	玄室床面	欠損
6	小玉	ガラス	5.4	7.7	1.7	0.5	あい色	玄室床面	完存
7	小玉	ガラス	5.0	7.3	1.7	0.5	あい色	玄室床面	完存
8	小玉	ガラス	4.7	6.8	1.7	0.4	あい色	玄室床面	完存
9	小玉	ガラス	4.7	7.8	2.0	0.4	あい色	玄室床面	完存
10	小玉	ガラス	5.7	7.3	1.5	0.5	あい色	漢道床面	完存
11	小玉	ガラス	3.6	6.5	1.8	0.3	あい色	玄室床面	完存
12	小玉	ガラス	5.1	6.4	1.7	0.3	みず色	玄室床面	完存
13	小玉	ガラス	4.6	8.0	2.4	0.5	あい色	玄室床面	完存
14	小玉	ガラス	4.9	7.9	1.4	0.4	あい色	玄室床面	完存
15	丸玉	ガラス	10.1	10.1	2.1	0.8	あい色	玄室床面	欠損
16	糸玉	琥珀	18.8	12.4	2.9	1.2	茶色	玄室床面	欠損
17	糸玉	琥珀	17.3	13.6	2.8	1.8	茶色	漢道床面	欠損
18	糸玉	琥珀	18.7	14.1	2.4	1.7	茶色	玄室床面	ほぼ完存
19	切子玉	水晶	24.9	14.4	3.8	6.0	白色	漢道床面	完存
20	切子玉	水晶	21.5	14.0	3.8	5.3	白色	漢道床面	完存
21	管玉	碧玉	19.7	5.1	2.2	1.0	ふか緑色	漢道床面	完存

メ調整する。67とセットになる。

無頭壺(70・71) やや扁球形を呈する体部より口縁部が内傾する。大形のもの(70)と小形のもの(71)がある。底部は回転ヘラケズリ調整する。71は体部外面の一部をカキメ調整する。70は69の蓋とセットである。

壺(72・73・82・83) 球形の体部より口縁がゆるく外反するもの(72・73)、大きく外反するもの(82・83)がある。72・73は口縁端部が下方へ肥厚する。体部下半の外面はヘラケズリ調整、上半はカキメ調整する。73は体部にヘラ記号を施す。82・83は体部外面に擬格子のタタキを施した後、カキメ調整する。82は頭部に櫛描波状文、83はキザミ目を施す。83は頭部にV字形のヘラ記号を施す。

脚付長頭壺(75~77) やや肩の張る球形の体部より口縁部が細長く上方へ伸びる。口縁端部は丸く終る。脚部は体部との境で最も細く、裾部で段がつく。脚部に台形と三角形を呈する2段の透しを施す。体部はカキメ調整する。75は74の蓋とセットであり、口縁部から体部の外面に赤色塗料を施す。

橈(79) 丸底に近い平底の底部より体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸く終る。体部外面には3条の凹線を施し、その間にヘラ描きの斜線を入れ羽状文とする。底部外面は回転ヘラケズリ調整、体部はカキメ調整する。78の蓋とセットになる。

提瓶(80) 扁平な体部を有するものである。口縁部は逆ハ字形に開き、口縁端部が丸く終る。肩部の2ヶ所に円形を呈する把手がつく。体部外面はカキメ調整する。

器台 (84・85) 杯部は浅い椀状を呈し、口縁部がわずかに外反する。脚部は長く、裾部でわずかに弯曲する。脚部に三角形、長方形、台形の透しを入れる。杯部と脚部には柳描波状文、列点文などを施す。

裝飾部品 (86~93) 壺か器台についていたものが剥落したものと考えられる。人物と動物がある。86は馬に乗った人物である。顔はヘラの刺突によって目、鼻を表現する。口はヘラを押しあてて表現する。頭部の左右に美豆髪と考えられる粘土紐を貼り付ける。左手、左足は欠損する。右手は内側に折り曲げており、体部の後より貼り付ける。足はハ字形に聞く。男性と考えられる。馬は基部に胴部より上を表現しており、足を省略する。ヘラによって目を表現し、耳は貼り付ける。背の中央にたて毛を表現する。粘土紐の貼り付けによって面繋を表現する。尻繩は粘土紐を並行にする。鞍は前輪と後輪を表現する。87は86と同様に馬である。形態は86とほぼ同様であるが鞍の下に粘土を貼り付けて障泥を表現する。尻繩のベルトはX状に粘土紐を貼り付けており、交点に円形の粘土にヘラによる刺突を施し、雲珠を表現する。全体にヘラによる円形の刺突文を施す。鞍部のつくりは粗雑であり、刺突文も施していないことから86と同様に人物が乗っていたと考えられる。88は86の顔の表現などからみて人物と考えられる。顔はヘラによる刺突によって目、鼻を表現し、口はヘラを押しあてる。頭部には粘土紐を貼り付けて髪を表現する。体部より両手が伸びるが欠損する。全体にヘラによる円形の刺突文を施す。坐っている女性像と考えられる。89は基部であり、ヘラによる円形の刺突文を施す。90・92は不明であるが、馬などのベルトの可能性がある。91は剥離痕などからみて88の手と考えられる。93は小動物と考えられ、顔の目、口などの表現はない。耳は粘土紐を貼り付けるが、一部欠損する。尾は折り曲げて上方へ伸びる。犬の表現と考えられる。

小形蓋 (94) 口径7.3cmを測る杯の蓋である。天井部はやや丸みをもち、口縁部がゆるく外反する。

小形鏡 (95) 口縁部を欠損する。球形の体部より頭部が大きく外反する。体部中央に小円孔を斜めに1孔穿つ。頭部に柳描波状文、体部に列点文を施す。

土師器 (第22図)

長頸壺 (81) 扁球形を呈する体部より、頸部が長く上方へ伸びる。口縁部はゆるく外反する。体部外面の下半はヘラケズリ調整、上半は横、斜め方向のヘラミガキ調整する。頸部外面は縱方向のヘラミガキ調整する。

鉄製品 (第25・26図)

鉄鎌、馬具、鎌、刀子、用途不明品がある。38~65は鉄鎌である。長頸鎌 (38~50) と短頸鎌 (51~55) がある。長頸鎌の身は柳葉状を呈し、茎部に段がつく。短頸鎌の身は菱形を呈するもの (51) と柳葉状を呈するもの (52・53) がある。66~88は馬具と考えられるものであり、66・67は辻金具、69・70はくつわか輪鎌、71・72・74はくつわ、73は絞具、68・75~88は飾り金具と考えられる。飾り金具の裏面には鋲がつく。77~87は長方形を呈するものであり、円形の文様を打ち出す。断面形が半円形、ゆるいU字形、側縁でL字形に曲がるものなどがある。

89は刃先がJ字形を呈する鎌であり、基部がL字形に折れ曲る。90は刀子の先端である。91～93は用途不明品である。

装身具（第27図）

ガラス製小玉（5～14）、丸玉（15）、琥珀製壺玉（16～18）、水晶製切子玉（19・20）、碧玉製管玉（21）、銀製空玉（22）、耳環（23）がある。耳環は腐食が著しいので詳細は不明。玉類は表1に詳細を記す。

M.まとめ

今回の発掘調査で明らかになったことを列記し、まとめとしたい。

- 夫婦塚古墳は双円墳か、あるいは切り合いのある2つの円墳になるか不明であった。今回墳頂部に幅1m、長さ6mの断面観察用のトレーナーを設定し、精査した結果、切り合い関係は認められなかった。盛土は両石室よりくびれ部に向かって盛られている。夫婦塚古墳は双円墳と考えられる。
- 夫婦塚古墳の築造は東側石室より出土した須恵器がTK10型式のものであることから6世紀中葉と考えられる。
- 東側石室より出土した副葬品は第1次埋葬時の原位置より動かされていることから、少なくとも1回の追葬がおこなわれたと考えられる。
- 西側石室では棺台と考えられる石を3ヶ所で確認した。このことから第1次埋葬の後、2回の追葬がおこなわれたと考えられる。出土した須恵器はTK43～TK209型式であることから、埋葬時期は6世紀後半～末である。
- 西側石室では多量の鉄釘が出土したことから主体部はすべて木棺と考えられる。東側石室は明確な鉄釘は出土していないが、石棺片が認められなかったことから、木棺と考えるのが妥当と思われる。
- 西側石室の棺台2で検出した人骨は、頭位を南に向けて、仰臥屈肢で埋葬されていた。年齢、性別等は不明である。
- 両石室から中世の瓦器、土師器が出土したことから、11～13世紀に石室は開口していたと考えられる。

図 版



1. 調査前の状況



2. 調査風景



1. 石組水路断面検出状況



2. 造構完掘状況



1. 遺構完掘狀況(東)



2. 遺構完掘狀況(西)

圖版4 夫婦塚古墳航空写真





1. 古墳全景(南より)昭和47年撮影



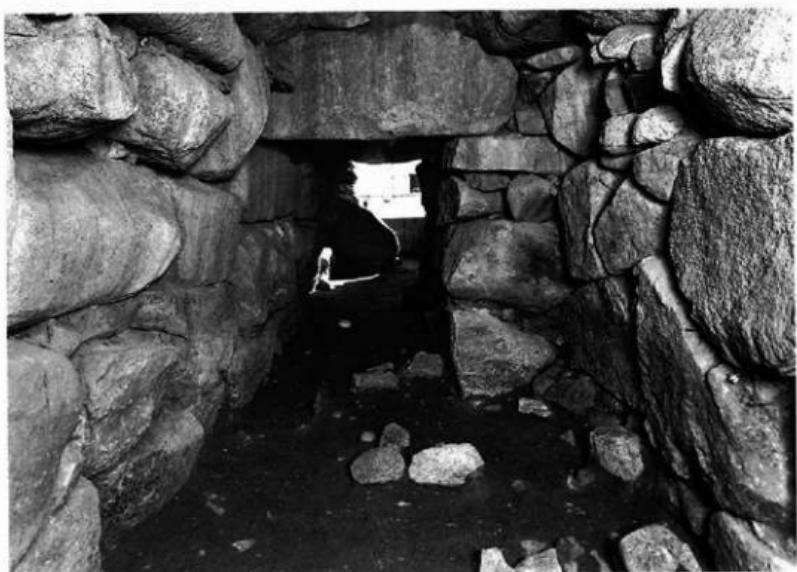
2. 古墳全景(南西より)



1. 西側石室入口



2. 床面検出状況(西側石室)



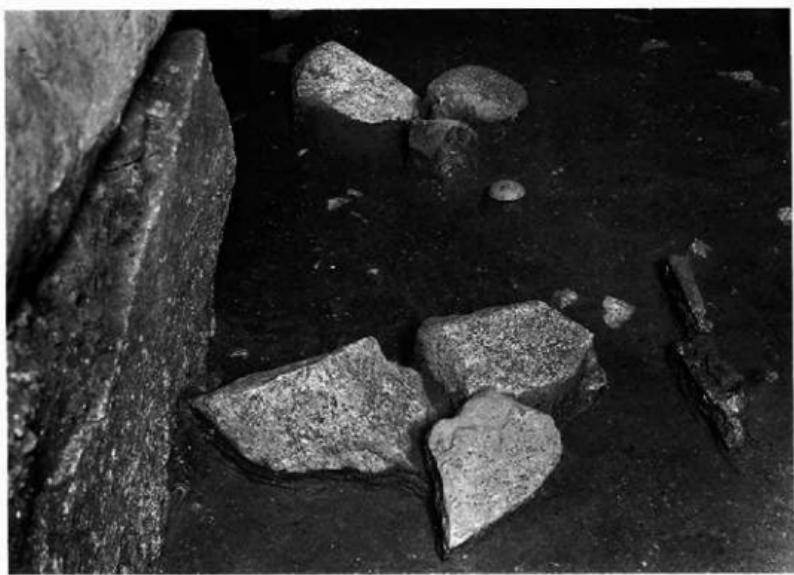
1. 石室全貌(西侧石室)



2. 玄室全貌(西侧石室)



1. 棺台 1 检出状况(西侧石室)



2. 棺台 3 检出状况(西侧石室)

圖版 9
夫婦塚古墳遺構



1. 棺台 2 檀出状况(西侧石室)



2. 人骨椚出状况(西侧石室)



1. 東側石室入口



2. 床面検出状況(東側石室)

圖版 11 夫婦塚古墳遺構



1. 床面検出状況(東側石室)



2. 奥壁(東側石室)



1. 片袖部壁(東側石室)



2. 片袖部遺物出土狀況(東側石室)



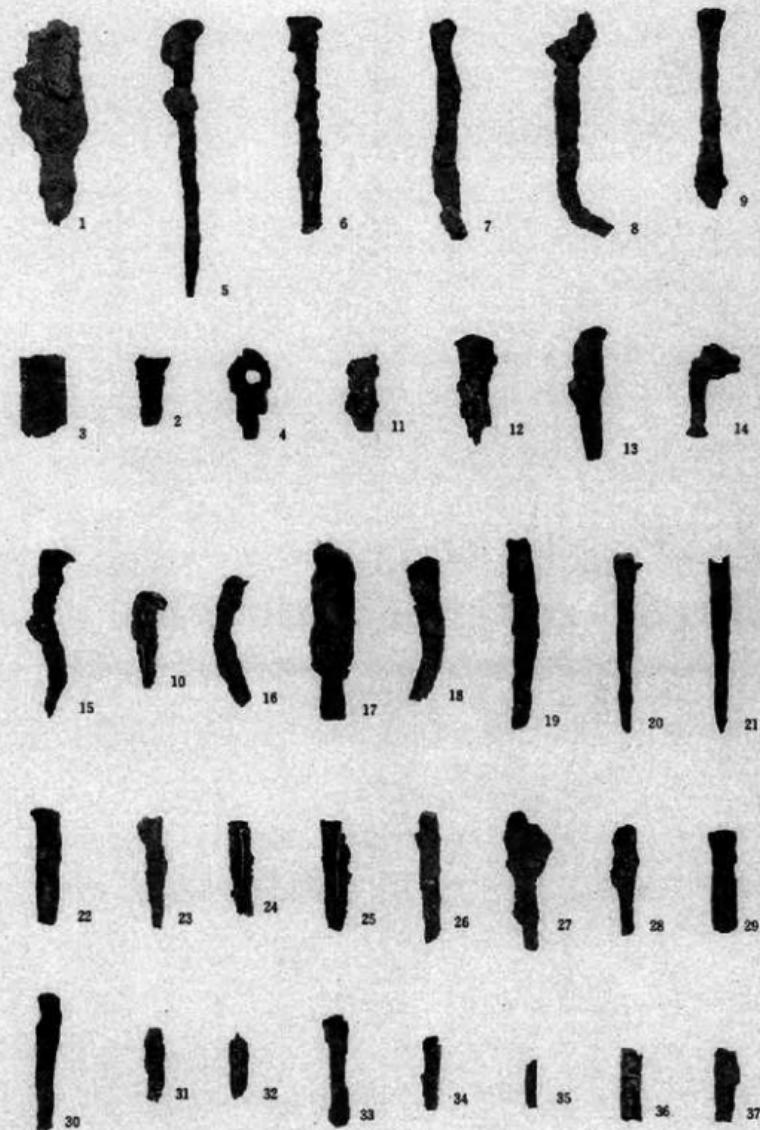
1. 女壁部遺物出土狀況(東側石室)



2. 女壁部遺物出土狀況(東側石室)



須恵器、土師器、瓦器、裝身具(西側石室出土)



鐵製品(西側石室出土)



32



26



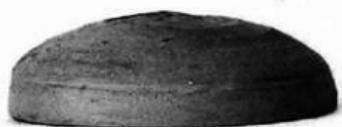
31



33



27



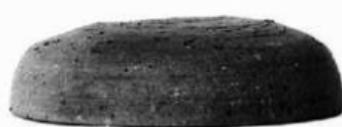
30



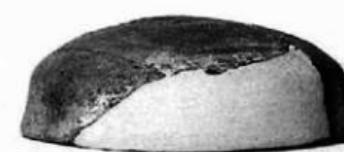
28



34



25



94

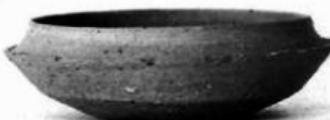


29

頸壺器(東側石塚出土)



35



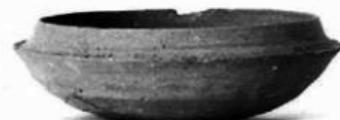
36



41



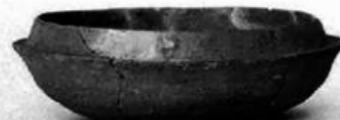
42



40



38



39



37



47



44

須恵器(東側石室出土)



46



45



51



45

須恵器(東側石室出土)



49



50



46



48

須恵器(東側石室出土)



58



52



60



55



54

須恵器(東側石室出土)



65



66



69



64



70



73



63

須恵器(東側石室出土)



74



67



75



68



72



71

須恵器(東側石室出土)



82



80



81



83

須恵器、土師器(東側石室出土)



78



76



79

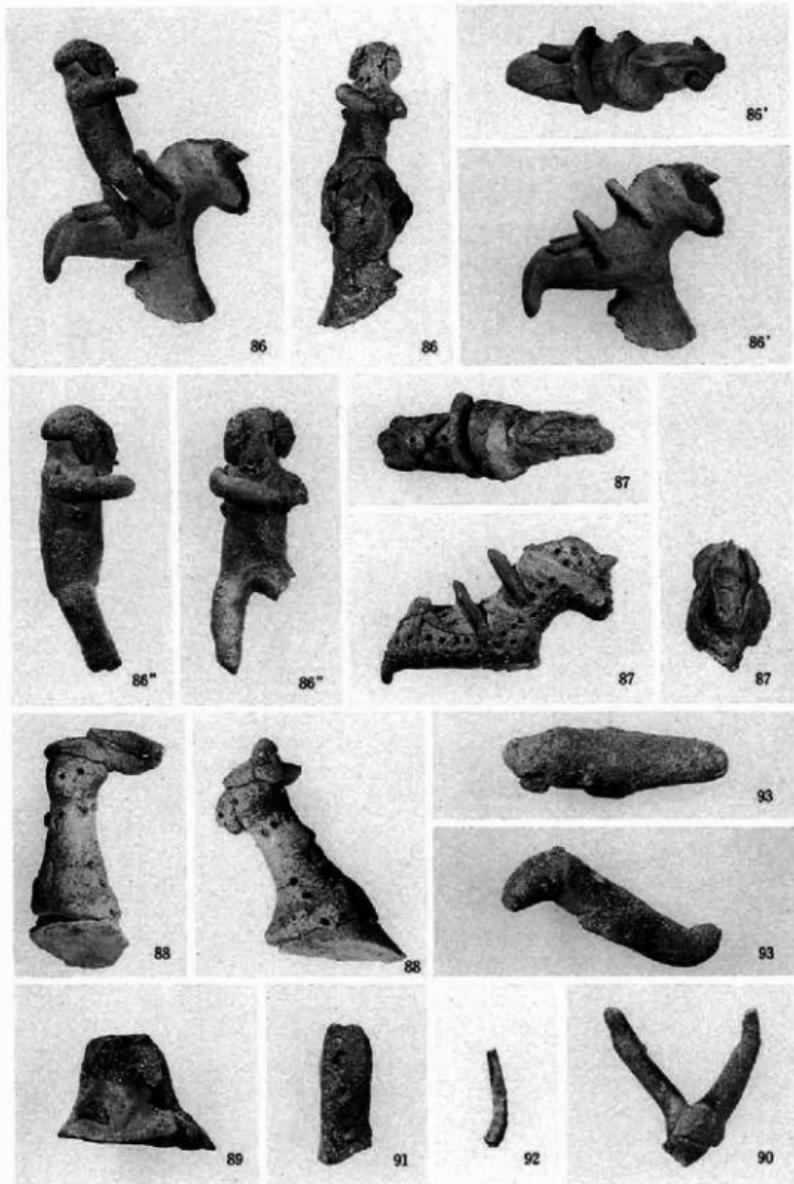


84

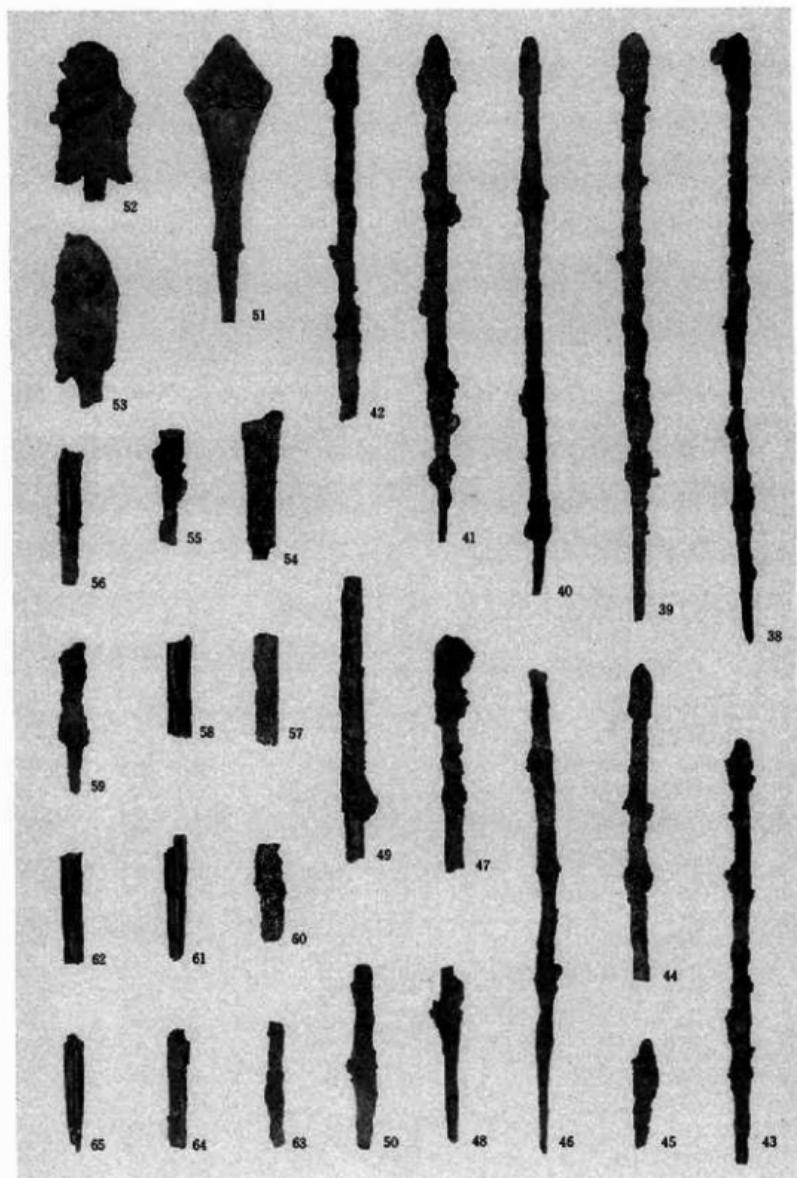


85

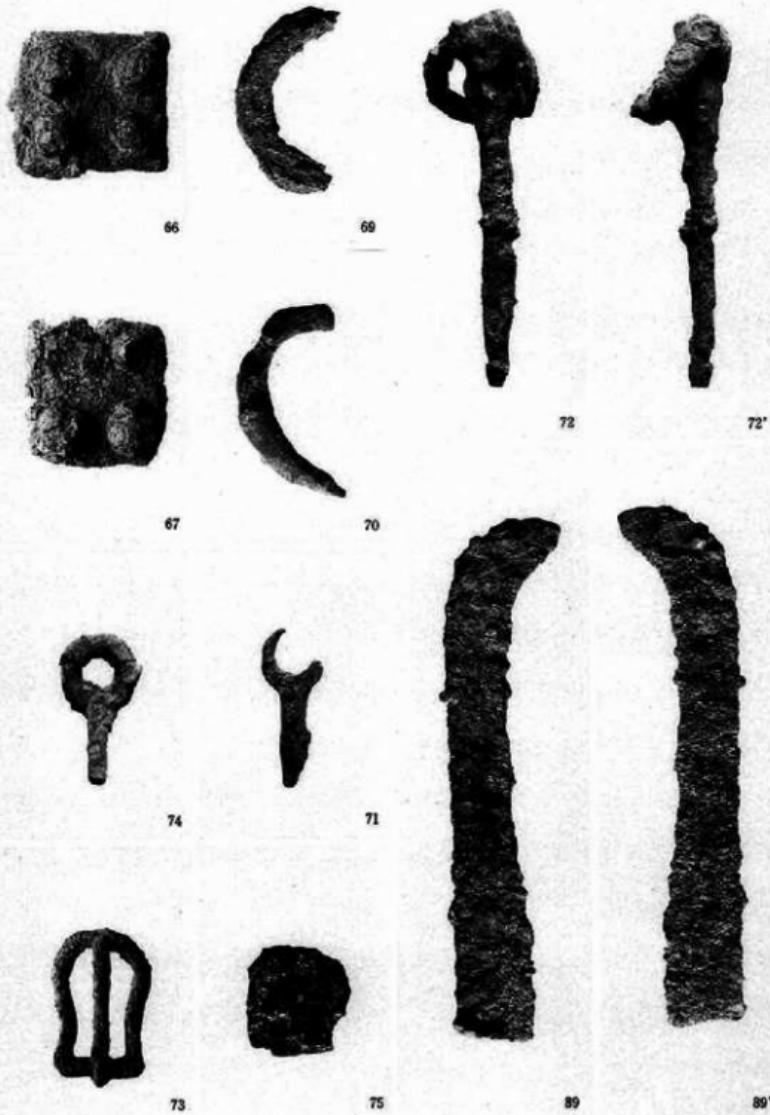
須志器(東側石室出土)



須忠器（東側石室）



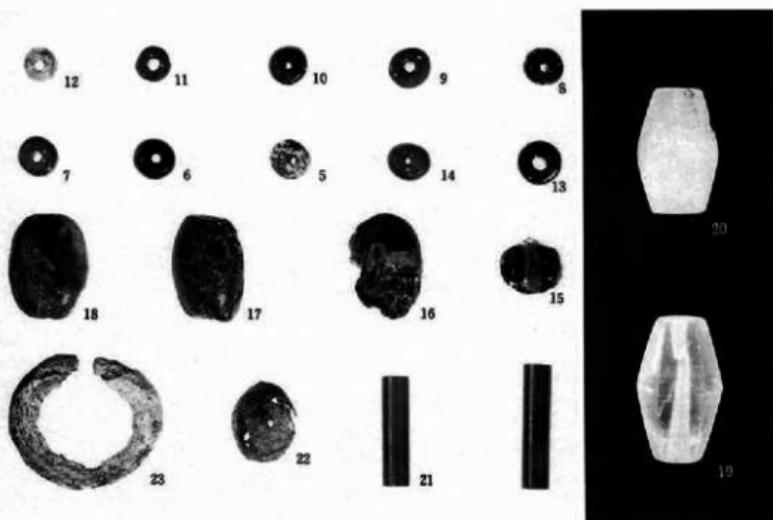
鐵製品(東側石室出土)



鐵製品(東側石室出土)



1. 鐵製品(東側石室出土)



2. 裝身具(東側石室出土)

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要30
東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要
—昭和63年度—

1989. 3

発 行 東大阪市教育委員会
印 刷 近畿印刷センター

東大阪市教育委員会
文化財課

